

サクラてんぐ巣病から染井吉野を守ろう。

サクラてんぐ巣病はかびの一種（タフリナ菌）が原因でおこる伝染病です。全国に植えられ、お花見を楽しませてくれる染井吉野はこの病気にとっても罹りやすく、罹った枝を放置しておくとも花が咲かなくなり、やがて樹全体に広がり枯れてしまいます。染井吉野は病気に弱く、寿命が短いといわれますが、その大きな原因がこの病気です。多くの地域で、この病気に罹った桜がそのまま放置されているため、これらが伝染源となって日本各地に被害が拡大しています。未来に向けて、染井吉野の花を楽しむためにも、蔓延しているサクラてんぐ巣病から染井吉野を守って行きましょう。

1. サクラてんぐ巣病の特徴

サクラてんぐ巣病に罹った枝には花が咲かないため、健全な部分が開花している時に小さな緑の葉が開いてくるので、花時の見映えが非常に悪くなります。また、病気の枝は年々、多数の枝を発生しながら大きなかたまりとなり、病気が樹全体に広がると著しく衰弱し、数年後には枯れてしまいます。伝染源となる胞子は、病気になった枝についた小さな葉の裏側につくられ、花が散り終わった頃から飛散し始めます。胞子は、雨水や霧に混ざって広がるといわれています。この病気は、川沿いや湖の周辺、霧のかかりやすい場所など、空中湿度の高い場所、日当たりや風通しの悪い場所で多く発生しています。また、植栽間隔が狭い場合、成育に伴って過密な条件になると発生が目立ってくる様です。サクラてんぐ巣病に罹ったまま放置しておくとも、病原菌の密度が高まるため、樹全体に被害が広がるとともに、周辺の桜にも伝染してゆきます。このような桜を放置したまま近くに植栽すると、その苗木も感染し被害が拡大、蔓延します。

2. サクラてんぐ巣病の防除対策

現在、最も効果的な防除方法は、病気に罹った枝を切除して伝染源を無くすことです。切除の時期は、病気の枝が見分け易いこと、胞子が飛散する前であること、剪定の適期であることなどから落葉期が適しています。切り口には保護剤を塗布しましょう。また、見落としやその後の発病などがあるので、2～3年は継続して行う必要があります。なお、切除と併せて肥料を施すことは、樹勢の回復に大いに役立ちます。

3. 新規植栽に当たっての留意点

ソメイヨシノは、成長速度が早く大木となるので、植栽間隔が狭いとすぐに過密状態となってしまいます。そうするとサクラてんぐ巣病が発生しやすくなるので、十分に間隔を空けて植えましょう。また、サクラてんぐ巣病に罹りにくい桜の品種もあるので、このような品種を選ぶことも大切です。



サクラてんぐ巣病に罹った染井吉野の状況

写真左：てんぐ巣病の枝（落葉期）、枝が細かく分かれている。

写真中：てんぐ巣病の枝（開花期）、花数が極めて少なく、新芽が伸びている。

写真右：てんぐ巣病が樹全体に広がり、枯死寸前の状態。